

幼稚園におけるユニバーサルデザインによる集団活動の授業改善の効果

高知大学 教育学部 寺田 信一
香南市立野市幼稚園 主査教諭 半田久恵

1 はじめに

幼稚園では、幼児の生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、人とかかわる力や思考力、感性や表現する力などを育み、人間として、社会とかかわる人として生きていくための基礎を培うことが大切であるとされている。幼児のその子らしいものの見方、考え方、感じ方、かかわり方などを理解した上で、幼児の抱えている発達課題に応じて指導している。特別な支援を要する子どもや活動内容によって個別に支援を必要とする子どもたちがいることもあり、一般的に学級全体の支援方法として、一日のスケジュールや活動内容を具体的にイラストや具体物を用いて示している。しかし、幼児の理解度は個人差があり、時には見通しがもてず不安になる子どもの姿も見られ、保育者は集団活動への参加が難しい子どもを気になる子どもと捉えてしまいがちである。保育者にとって気になる子どもと捉えた行動はどこから表れているのか、もう一度、幼児理解や保育を見直し、集団活動における有効な指導方法について検討する。

2 研究の目的

本研究の目的は、年長児の子どもたちの行動観察や実態把握を行い、個性を理解し、ユニバーサルデザイン(UD)に基づく集団活動の授業づくりを検討する。具体的には、下記の3点である。

- (1) 日常活動をUD化して実践を行い、成果と課題を考察する。
- (2) 集団活動の授業づくりをUD化して実践を行い、UDの効果について成果と課題を考察する。
- (3) 集団生活の中で、課題となっている「先生の話聞くとき」の指導として、ソーシャルスキルトレーニング(SST)を実施し、その成果と課題を考察する。

3 研究方法

(1) 対象

本研究対象園は、香南市のA幼稚園で、3歳児から5歳児までの全園児数103名の園である。

対象幼児は、5歳児年長児Bクラス 男児10名、女児9名の計19名である。Bクラスには、UDに基づいた授業づくりを行う。

(2) 質問紙(SDQ)

対象クラスの幼児の実態把握として、担任及び加配教員に質問紙(SDQ)を実施し、その結果からクラスの傾向を探っていくこととする。

(3) 日常活動 文字・時計理解評価

6月22日から6月24日に対象クラス年長児19名に対して、一日のスケジュール表記・活動内容の提示より、【文字の読み】【文字と数字の読み】【時刻を読む】【時計の図と本物の時計とのマッチング】【絵カード】の5つの項目ごとに用紙に表記をし、その用紙を提示しながら子ども一人一人に聞き取り調査を行う。

(4) ユニバーサルデザインに基づいた集団活動の評価(図1・図2 チェックリストは別紙参照)

保育実践での実態把握と提案を行うにあたり、「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」(2010)を使用した。

ア 手続き

日程：7月7日（木）

保育内容：七夕製作活動（折り紙製作 30分間）

評価者：幼保支援課より1名、香南市子ども課より1名、高知大学協力教員、園長、教頭
担任、研究生、各1名の計7名

イ 平均値

指導提案として、アプローチしていく必要のある項目を明確にするために、集計結果の得点化を行い、その平均値を表す。尚、得点は「かなりできている+2」「少しできている+1」「どちらともいえない±0」「あまりできていない-1」「まったくできていない-2」として計算をする。項目により無回答がある。

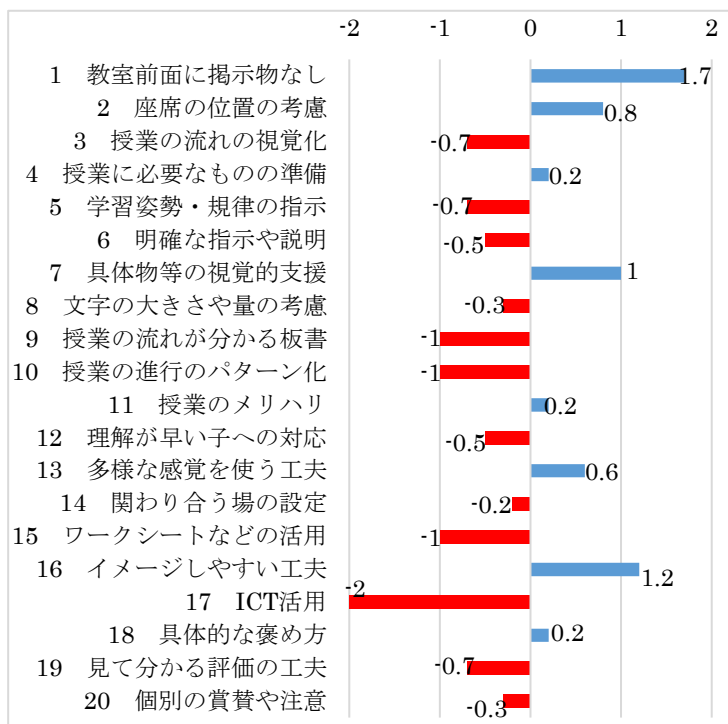


図1 集団活動の評価結果の平均値

ウ 指導提案

評価結果の平均値で、マイナス評価となった項目〔項目3、5、6、8、9、10、12、14、15、19、20〕についてユニバーサルデザインに基づいた環境の改善、保育の指導方法について検討を行う。平均値はプラス評価であるものの、0かマイナス評価者がいる項目〔1、2、4、11、13、18〕についても実践に基づき指導方法を検討していく。保育評価結果を踏まえ、クラスの幼児の実態把握のための行動観察や担任、加配教員からの聞き取り調査を4月から7月までを行い、その行動観察結果とSDQの結果を基に、対象クラスでの集団活動を通して行動観察を行いながら、実態に応じて、ユニバーサルデザインの5つのポイントに基づいた指導提案を行い、担任が保育実践を行った。

(5) ソーシャルスキルトレーニング (SST)

対象クラスの行動観察や担任、加配教員からの聞き取り調査を行う中で、話が聞けない、落ち着かないという課題があった。担任は、話を聞けるようにするために、自由な座り方から当番チームで座るようにしたが、担任の方を静かに、注目するように何度も指示をしていた。担任の方を静かに見ている子どもは数少なく、静かにしているが担任を見ていない子ども、勝手な私語や発言をする子ども、担任が注意すると向くが長続きしないなど落ち着かない子どもの言動が見られた。また、担任が指導方法に悩んでいることも分かった。これらのことを踏まえて、担任自身が「先生の話を書くとき」のスキルを理解した上で、子どもたちに指導する必要があると考え、SSTを実施するに至った。

4 結果

(1) 日常活動

一日のスケジュール表記・活動内容表記から、【文字の読み】【文字と数字の読み】【時刻を読む】【時計の図と本物の時計とのマッチング】【絵カード】の項目について調査した結果は、項目ごとに人数と割合を下記にて表記する。

表1 【文字の読み】の人数及び割合

対象クラス		
	読める人数 (%)	読めない人数 (%)
①すきなあそび	15 (79)	4 (21)
②かたづけをする	14 (74)	5 (26)
③そうじ	14 (74)	5 (26)
④せんだんひろば	12 (63)	7 (37)
⑤えんてい	16 (84)	3 (16)
⑥きょうのてんきは	12 (63)	7 (37)
⑦あめです	13 (68)	6 (32)
⑧たいそうは、ゆうぎしつでします	12 (63)	7 (37)
⑨こーにゃんりずむたいそう	12 (63)	7 (37)
⑩なんじゃもんじゃにんじゃまつりをします	10 (53)	9 (47)

【結果】

クラスの子どもの約70%は読めるが、約30%は読めなかった。そのため、視覚提示はイラストと文字を使用することにした。

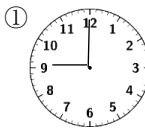
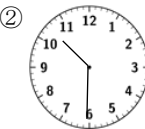
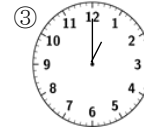
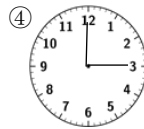
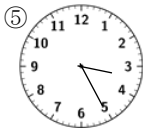
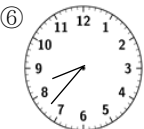
表2 【文字と数字の読み】の人数及び割合

対象クラス		
	読める 人数 (%)	読めない 人数 (%)
①9じ	14 (74)	5 (26)
②10じ30ふん	13 (68)	6 (32)
③1じ	15 (79)	4 (21)
④3じ	15 (79)	4 (21)
⑤3じ25ふん	12 (63)	7 (37)
⑥8じ37ふん	12 (63)	7 (37)

【結果】


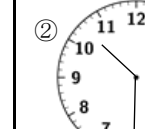
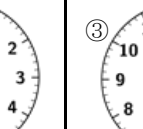
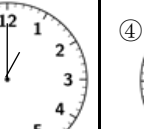
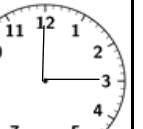
クラスの子どもの約70%は読めるが、約30%は読めなかった。そのため、タイムタイマーを使用することにした。

表3 【時刻を読む】の人数及び割合

対象クラス						
時計図						
読める 人数 (%)	18 (95)	3 (16)	13 (68)	16 (84)	3 (16)	1 (5)
読めない 人数 (%)	1 (5)	16 (84)	6 (32)	3 (16)	16 (84)	18 (95)

【結果】正解率は、①と④は80%以上だが、③は68%、②と⑤と⑥は20%以下であり、全員、時刻を読めなかった。そのため、タイムタイマーを使用することにした。

表4 【時計の図と本物の時計とのマッチング】の人数及び割合

対象クラス					
時計図					
合う 人数 (%)	18 (95)	18 (95)	17 (89)	16 (84)	15 (79)
合わない 人数 (%)	1 (5)	1 (5)	2 (11)	3 (16)	4 (21)

【結果】正解率は、①、②は 95%、③は 89%、④は 84%、⑤は 79%であり、全員がマッチングできなかった。そのため、タイムタイマーを使用することにした。

表 5 【絵カード】の人数及び割合

対象クラス							
絵カード	①着替え 	②掃除 	③プール遊び 	④給食当番 	⑤水やり当番 	⑥挨拶当番 	⑦飼育当番 
分かる 人数(%)	14 (74)	19 (100)	19 (100)	14 (74)	18 (95)	14 (74)	14 (74)
分からない 人数(%)	5 (26)	0	0	5 (26)	1 (5)	5 (26)	5 (26)

【結果】②と③については、正解率 100%であった。⑤については、正解率は 95%、①、④、⑥、⑦については 74%の正解率であり、全員は分からなかった。そのため、イラストと文字の表示や提示物を用いた活動内容の説明を行うことにした。

(2) 集団活動

ユニバーサルデザインに基づいた
集団活動の事後評価

日程：11月14日（月）

保育内容：どんぐりの木製作

（折り紙製作 1時間）

評価者：香南市子こども課より1名、他の保育所より2名、研究生2名、高知大学協力教員、園長、教頭（園内特別支援コーディネーター）、担任、各1名の計9名で行った。

【結果】17項目の平均値は、1点以上のため高い評価である。

〔項目19〕は、平均値は高くなったが1点未満であるため、評価が上がったとは言えない。

(3) SST

ア SST時の保育者・幼児の行動記録

(ア) 保育者

保育者と加配教員間で事前に打ち合わせを行い、身に付けたいスキル、決められた言葉での指示、支援児に対する指示の確認と評価シールの利用と行うタイミング、指導者や加配教員の立ち位置等の確認を行った。加配教員が支援児に行う評価シールは、支援児に声をかけ行うようにしていたが友達と同じように行動を続け、評価シールを利用しなかった。指導後、担任が次の活動を知らせるため、すぐに取り入れ確認をし、指導を行っていた。

(イ) 幼児

当日は欠席者がいたため15名で行い、指導者が子どもたちの前に立つと落ち着かず聞く姿勢になれない子どもが半数以上いたが、指導者が話を始めると姿勢を直し、ストーリーで示す

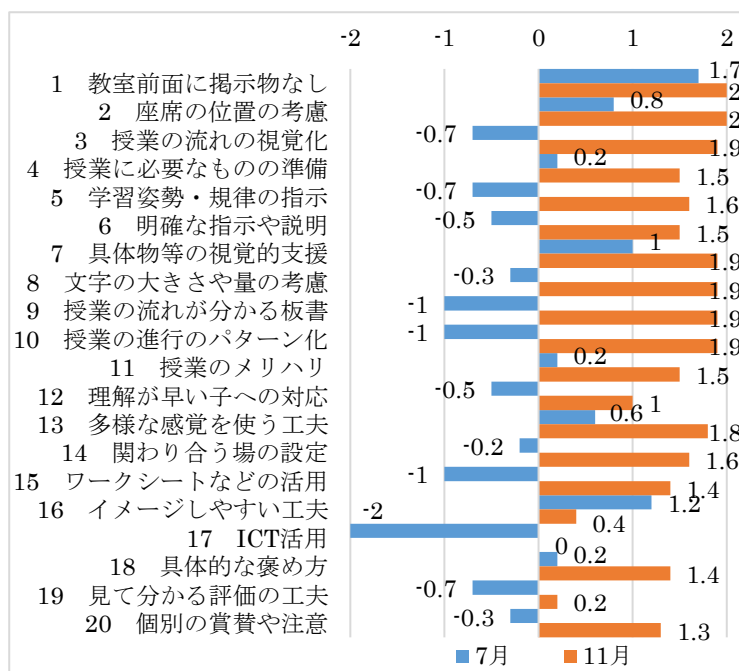


図 2 事前事後の集団活動の評価比較

姿勢と同じ姿勢をとっていた。いつもと違う周りの様子が気になり、指導者を見ていない子どもも3名いたが、ロールプレイでは聞く姿勢がとれた。全員が揃った2回目の指導では、1名につき終始居ること、時々指導者を見る、1回は手と足を揃えることだけできた。

イ 環境整備

SSTを導入した時と同じように、子どもたちが担任の話を聞く時は、保育室の前面にあるロッカーに毎回、白い布をかけたり、全員が揃ってから話を始めたりするように環境を整えている。

ウ 実施後の機会利用型指導

SST実施後、担任は話をする前に必ず「先生の話を聞きましょう」と合図を出すように努めていた。しかし、担任は、聞く姿勢がとれない子どもに気付いてもらいたいあまりに、言葉で「先生の話を聞きましょう」を何度も繰り返した。その結果、子どもへの負担となったため、手を2回叩き「先生の話を始めます」の合図に変更し、再度、子どもたちが自ら気付く言葉のかけ方、確認カードの示し方などを確認した。支援児については、加配教員が子どもの姿を確認し、必要な時に視覚カードを見せ確認を行ったことで、担任の合図を聞くと自ら望ましい姿勢をとるようになった。支援児1名については、座る場所を視覚的に提示し座ることから始め、先生の顔を見る、口をとじる、手足を揃える3つのスキルを取り入れているが、身につけにくさが見られるため、機会利用型指導を継続している。

エ まとめ

SST導入によって、指導者を見てない幼児は半数以上いたが、ロールプレイまでやっていくと、機会利用型指導を継続している幼児は、支援児1名のみとなった。

(4) SDQ

SDQは、事前（プレ）6月に、事後（ポスト）11月に実施した。カテゴリー別に比較を行う。

表6 SDQの事前事後の人数の割合

		行為 人数(%)	多動不注意 人数(%)	情緒 人数(%)	仲間 人数(%)	向社会性 人数(%)	TDS 人数(%)	
カテゴリー	プレ	High Needs	1(5.26)	2(10.53)	4(21.05)	3(15.79)	5(26.32)	3(15.79)
		Some Needs	3(15.79)	3(15.79)	2(10.53)	0	0	0
		Low Needs	15(78.95)	14(73.68)	13(68.42)	16(84.21)	14(73.68)	16(84.21)
	ポスト	High Needs	1(5.26)	2(10.53)	5(26.32)	2(10.53)	3(15.79)	3(15.79)
		Some Needs	1(5.26)	0	0	1(5.26)	0	0
		Low Needs	17(89.47)	17(89.47)	14(73.68)	16(84.21)	16(84.21)	16(84.21)

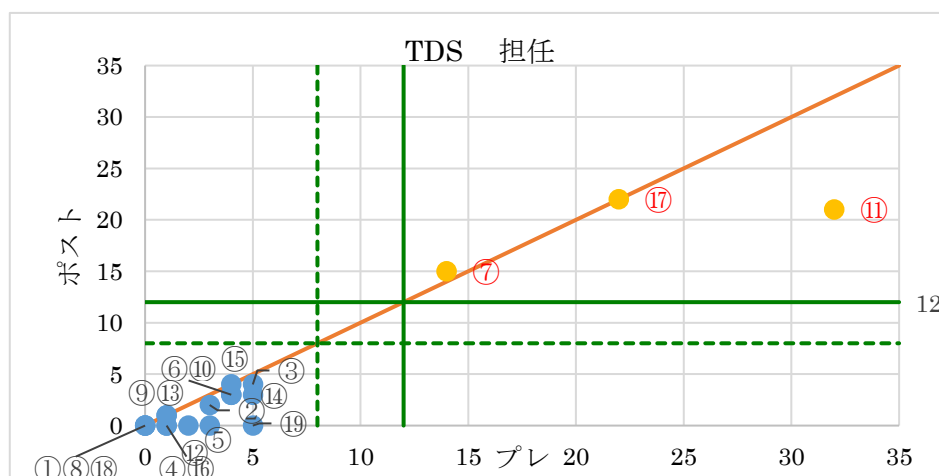


図3 TDSの事前事後での比較分布図

【向社会性】

HighNeedsであった2名について、HighNeedsではなくなった。

【TDS】

支援児3名のうち2名は、ほぼ変わらないが、支援児1名についてはTDSの事前事後の得点が11点下がっている。

※TDSは、行為、多動不注意、情緒、仲間関係を合計したものである。

5 考察

(1) 日常活動のUD化の成果と課題

9月から11月まで実践を行い、成果と今後の課題を一部抜粋して下記にて表記する。

表7 ユニバーサルデザインポイントに基づいた実践の成果及び今後の課題

UDポイントⅠ 環境の工夫				
実態	提案	実践	成果	今後の課題
個人ロッカー上にある、スケジュールボードを見ていない。	スケジュールボードの位置をかえる。	子どもの目線の高さに設置する。	自ら確認するようになった。	
椅子置き場の椅子の数、状態は気付かない。	置き方と数が分かるような工夫をする。	椅子の写真と数を表示する。	数の多少に気が付き、確認し、片付けだした。	
UDポイントⅡ 情報伝達の工夫				
スケジュールに活動の終わったカードが掲示されている。	活動の終わったカードは除ける。	子どもの前でカードを除ける。	次の活動へ取りかかるようになった。	
活動を示すカードには、複数の絵があるため、分かりにくい。	シンプルなものにする。	主になる具体物を表示する。	確認の時間が短くなった。	活動により複数の絵があるので、改善が必要である。
UDポイントⅢ 活動内容の工夫				
一日の流れは前日の降園時に伝えるため、翌日の活動に消極的である。	当日の朝、一日の流れを確認する。	全員が揃う時間に朝の話をする。	落ち着いて活動に参加するようになった。	
UDポイントⅣ 教材・教具の工夫				
給食をのんびり食べている。	タイムタイマーを使用する。	食事前に担任が提示する。	残り時間の表示を気にして食べるようになった。	

(2) 集団活動のUD化の成果と課題

10月から11月まで実践を行い、成果と今後の課題を一部抜粋して下記にて表記する。

表8 ユニバーサルデザインポイントに基づいた実践の成果及び今後の課題

UDポイントⅠ 環境の工夫			
実態	工夫	成果	今後の課題
保育室前面に刺激になるものがあり、子どもの視線がそれる。	集団活動時は、個人ロッカーに白い布をかける。	子どもたちの視線が一点に集中する。	
各チームで座ることは決まっているが自由席のため、席を選び過ぎ活動が遅れる。	一人一人の座席を決め、座席表(模造紙)を提示する。	すぐ着席ができ、友達を待たせなくなった。	
全体での活動の終わりが分からないため、担任に尋ねることが多い。	イラストと文字を使用した工程表(模造紙の大きさ)提示する。	終わりを担任に聞かなくなった。	
UDポイントⅡ 情報伝達の工夫			
折り方は口答説明をしながら折り、見せていたが、見なくなり、私語が始まる。	全体で提示する手順表を提示し、一緒に折る。	折る順番を終始見ていた。	

UD ポイントⅢ 活動内容の工夫			
難しい折り方から折り進めたため、「できんかも」「難しい」とつぶやく。	端的な言葉（スクリプト）と手順表（折り方の手順）を提示し、簡単な折り方から進める。	子どもたちから「簡単」と聞かれた。積極的に自分から試そうとし始めた。	
子どもの注目を促す時は「先生の方を見てね」と声をかけるが、全員が注目すること難しい。	担任に注目する時は「先生の方を見て下さい」、子どもたちが作業する時は「どうぞ」とパターンを決め最後までやり通す。	合図に気付き、作業をやめ、担任の方を向くようになった。	
UD ポイントⅣ 教材・教具の工夫			
活動の終わりが分からない。	タイムタイマーを使い、活動の終わりを示す。	最後までやり遂げようとするようになった。	タイムタイマーが難しい場合は、その時間の内容を視覚的に提示する。
UD ポイントⅤ 評価の工夫			
グループ活動をしているが、子ども同士のやりとりが少ない。	自己・他者評価ができるように見せ合う。	友達が話を聞き、拍手をしてくれたため喜んでいて。	発表の方法について分かりやすい手立てが必要である。
保育者の評価が「すごいね」「できたね」等に偏り、子どもの反応が薄い時がある。	手順表を見て一人で折れた時は「手順表を見て、自分で折れたね」と具体的に褒める。	自分で「やった！」「一人でできたよ」と喜んでいて。	

(3) SST の成果と課題

SST 導入によって、指導者を見てない幼児は半数以上いたが、18名はできるようになり、機会利用型指導を継続している幼児は、支援児1名である。機会利用型指導を継続する要因は、随伴性マネジメント（ルールへの呈示、参加行動への積極的なフィードバックなど）を丁寧に行うことでソーシャルスキルの獲得を目指していくことになるはずのフィードバック、即時賞賛が足りなかったためと考えたからである。今後は「先生の話聞くとき」のスキルを定着させるために、できる限り話を聞く時の環境を継続すること、適切な行動ができた時に即時フィードバックし賞賛を行うことが必要である。

(4) SDQ から見たクラス運営

ア TDS

クラスの傾向として、困難さを示した幼児はやはり特別な支援が必要な子どもであった。得点が11点下がっている支援児については、活動の工程表を提示しながら説明すると提示物を見る回数が多くなっていった。情報伝達と活動内容の工夫を視覚的にしたため、手順表を見て自分で作れた達成感を味わっていたと推測される。見て分かるものがあることで、必要な情報が消えていかない、思い出せる、確認ができることから、活動が分かりやすく、取り組みやすくなったのではないかと考えられる。また、グループ活動を意図的に取り入れたことで、周りの友達に関心を持ち、自分から友達にかかわったりするようになってきたと考えられる。ポストの得点が1点高くなった支援児については、長期にわたり休んでいたため、集団生活に緊張し加配教員に依存してしまっていたと考えられる。プレポストともに得点の変化はなかった支援児については、得点が高いままである。集団活動の進め方をパターン化すると、数分だった集中時間が50分近く持続され、本児にとって有効だったものの、担任が本児の行動を多面的に見るようになり、その行動に注目するようになったためだと考えられる。今後の課題としては、支援児に応じた個別の支援について、より具体的な工程表や手順表の提示が必要であることが明確になった。また、評価の工夫についても、子どもたちが褒められていることを見て分かる方法について検討し工夫を行う必要があると考えられる。

イ 社会性

ブレが HighNeeds であった 2 名が HighNeeds ではなくなったことについては、グループ活動を意図的に行ったため、一人は同じチームの友達に少しずつ「わからない」と言えるようになり、もう一人は、困っている友達を助けたり、友達のアイデアを認めたりするようになってきた。グループ活動の充実を図るために、活動の流れや活動の内容が視覚的に分かりやすく提示したことで、作業手順を確認できるものがあり、友達と一緒に確認し、問題を解決できたと考えられる。また、グループ活動中でも、担任や加配教員から、挑戦しているところや頑張っているところを認めたり励ましたりする言葉をかけてもらうことで、友達に関心を持ち認めてくれる仲間ができ、自分の行動に自信がもてるようになったのではないかと考えられる。

6 まとめ

多面的に子どもの実態を把握する方法として、応用行動分析を用いての行動観察や質問紙 (SDQ)、ユニバーサルデザイン (UD) に基づいた授業づくりチェックリストを使用した。SDQ を行うことで、担任が子どもをどのように捉えているのかが分かり、子どものもつ強さと困難さが明確になった。クラス全体の傾向を捉えることで、UD に基づく指導の工夫を行うことができるからである。

日常活動の UD では、年長児であるということで、保育者は視覚的な提示として文字表示を行ったり、口答指示を行ったりしがちであるが、それは有効な指導とはなっておらず、保育者が気になる子どもと捉えた言動につながっていることが行動分析で明確になった。全員の子どもたちが分かるためには、イラストと文字を用いることや、そのイラストが活動自体につながるシンプルな提示であることが重要であると分かった。時間の表示の仕方についても、視覚的に時間の量や終わりが分かることが大事であり、時間の感覚を育てるという意味で、区切りを明確にする意義もあるタイムタイマーを使用することは、子どもたちの生活の流れが分かる有効的な手段であると考えられる。幼児教育は遊びを中心とした生活を通して体験を重ねていくため、一日を時間ごとで区切ることは難しいが、年齢に応じて主な活動での時間配分を示すための使用は可能であると考えられる。

集団活動の UD では、UD の 5 つのポイントに基づく授業改善を行うことにより、活動内容が分かり、自分でできることが増え、自信になり意欲が沸く効果があった。また、活動のパターン化を行うことで、就学前である 5 歳児にとって、集中力の持続に有効であるとも考えられる。そのため、年少児から UD の視点を取り入れ積み重ねることが重要だと考えられる。担任が UD の視点を取り入れ一斉指導を行うことで、支援の必要なポイントが絞られ、加配教員の役割もより明確になってくる。そのため、年間の研究保育の中に UD の視点を取り入れ、全職員で共通理解されることにより、保育の質も向上すると考えられる。

SST では、クラス全体で行ったことによりクラスのルールができ、互いに意識するようになった。保育者はルールがあることで、できていない時に注意をしまいがちだが、できている時にこそ「先生を見てくれているね」「手と足が揃っているね」など具体的に褒めてフィードバックすることが重要である。このような評価の仕方を職員間へ広げ、理解を深めることが望ましいと考えられる。

幼稚園での指導方法や子どもたちが身に付けたスキルは、小学校生活でも生かされることが望ましく、小学校へ引き継ぐことも重要であると考えられる。

【引用・参考文献】

- 1 高知県教育委員会 (2013) すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック-ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援-
- 2 文部科学省/編 (2008) 「幼稚園教育要領解説」
- 3 東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会・小貫悟 (2010) 「通常学級での特別支援教育のスタンダード」東京書籍
- 4 山本淳一・武藤崇・鎌倉やよい (2015) 「ケースで学ぶ行動分析学による問題解決」金剛出版